

鷺崎秀一著『近代文学における〈笑い〉の小説の生成』

章 瑋

日本の文明開化は凄まじかった。革新はあらゆるところで起こり、無論文学にも影響を与えた。当時のエリートたちは西洋文学を吸収し、江戸以来の戯作に別れを告げようと、新しい文学の模索に熱中した。そのさきがけともいわれる、明治二〇年代の小説における言文一致の試みは、日本近代文学史上に目覚ましい挑戦である。その後も絶えず、文学を改良しようと試みられてきた。本書の著者である鷺崎秀一氏が注目してきた、大正時代の〈笑い〉の小説の変容もその一つである。

〈笑い〉を主眼とする読み物は古くからあり、就中江戸後期に爆発的な人気を集めた戯作がその代表格である。しかしあくまでも庶民向きであることから、戯作をはじめとする〈笑い〉の社会的位置付けは、決して高くなかった。やがて明治に入ると、低俗な戯作的な〈笑い〉は文壇から排除されてしまう。夏目漱石の「吾輩は猫である」(明三八、九)が成功を収め、「〈笑い〉を描いてもなお内容を持ち、さらに広汎な読者層の支持が得られること」が実証されるまでは、「近代文学における」笑ひの喪失(中村光夫)と称されるほど、明治文壇における〈笑い〉の小説は振るわなかった。

漱石の成功は、後に大きな影響をもたらした。多方面から〈笑い〉の質の向上が模索され、大正中期には空前の活況を呈し、さらなる

進化を遂げた。著者は、明治期の〈笑い〉の小説に比べ、大正期は「安易なくすぐりに頼らず、合理性を有した」と位置付けている。かくして著者は大正期を一つの転換点と見做し、それ以前と以降を二部に分けて論じた。本書の構成は以下のである。

第I部 近代の〈笑い〉と明治期の〈笑い〉の文学

第一章 明治・大正期における〈笑い〉の変容

第二章 明治期の〈笑い〉の文学

——国木田独歩を例に

第一節 未だ見ぬ真の滑稽(ユーモア)

——国木田独歩「郊外」

第二節 近代滑稽小説の系譜

——国木田独歩「園遊会」

第三節 近代滑稽小説の系譜(二)

——国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」

第四節 独歩文学の〈笑い〉

——「泣くことを免れんが為め」

第II部 大正期の〈笑い〉の文学

第一章 芥川龍之介

第一節 〈鼻〉言説と〈笑い〉を問う文学

——芥川龍之介「鼻」論

第二節 芥川龍之介「片恋」論

——チャップリン流行下における〈西洋の曾我の家〉表象から

第三節 芥川龍之介「風」論

——加賀藩の長州征伐と喜劇活動写真の流行から

第二章 岩野泡鳴

第一節 岩野泡鳴「猫八」に見る〈笑い〉の近代文学

——〈有情滑稽〉に潜む批評精神

第二節 都会病の有情滑稽

——岩野泡鳴「浅間の霊」

第三節 新温泉に行く大阪の坊っちゃん

——岩野泡鳴「ぼんち」

第三章 宇野浩二

第一節 芥川龍之介が見た宇野浩二の「エスプリ・ガウロア」

——「長い恋仲」と滑稽文学者海賀変哲との対比に

示された世界

第二節 宇野浩二「屋根裏の法学士」論

——「何う云ふ風に社会に泳ぎ出すだらうか」

著者はまず、第Ⅰ部において「明治・大正期における〈笑い〉の変容」を通時的に確認し、すでに知られた漱石の〈笑い〉の文学と比較検討するため、「明治期の〈笑い〉の文学」の代表に国木田独歩

を選んだ。独歩の作品から「郊外」（明三三）、「園遊会」（明三五）、「牛肉と馬鈴薯」（明三四）、「泣き笑ひ」（明四〇）の四作を取り上げ、各作品の分析を通して独歩文学の〈笑い〉が年を経るごとに、〈笑い〉を取り巻く時代状況とともに成熟してきたことを確認している。こうした前史が、大正期における〈笑い〉の小説の、文学領域における地盤を固める役割を果たしたという。

続いて第Ⅱ部は、本書の中心である「大正期の〈笑い〉の文学」をめぐる展開し、芥川龍之介、岩野泡鳴、宇野浩二の作品を取り上げる。「笑い」の文学を検討するために、この三人の名前が並ぶのはやや意外であったが、説得力のある内容であるので、読後は改めて著者の着眼点の良さに感銘を受けた。世代がわずかに前後するこの三人の作品を通じ、同じ大正期における〈笑い〉の受容を分析するにあたって、より客観的に時代状況を把握できる利点がある。正確な時代背景を知る上で、著者は最終的に、この時期の〈笑い〉の小説は、「過去の滑稽文学との差異化を図」りながら、「笑い」の志向が、「笑い」の主体人物、ないし〈笑い〉自体を相対化するものへと変容してきた」という結論を導いた。

なお、本書は二〇〇八年三月に筑波大学大学院人文社会科学研究所へ提出された同題の博士論文（本誌第三三集（二〇〇八年二月）に紹介済み）をもとに、後に発表された研究論文を加えて再編したものである。博士論文に取り上げた各作家ごとに新たな作品に分析を加えた本書の増補は、著者が一貫して構築しようとしている近代〈笑い〉の文学史をより充実させたものである。

（二〇一八年三月三十一日 昂洋書房 三〇〇頁 四〇〇〇円＋税）